

パーキンソン病についての症状は？

★

パーキンソン病は、「神経難病」といわれ、徐々に進行していく原因不明の病気です。通常は、50歳以降に発病することが多いですが、20代で発病することもあります。

若年パーキンソン病は、40歳までに発症する患者のことで、患者総数の5%を占めます。

パーキンソン病は完全に治すことはできませんが、薬の開発を中心に治療法が年々確立されてきており、コントロールできる病気となりつつあります。

パーキンソン病は、自分の意思で身体を動かすために必要な神経伝達物質「ドーパミン」が不足し、脳の指令が身体にうまく伝わらず、手足のふるえ、動作が緩慢になるなどの症状があらわれます。

日本の患者数は、人口1万人あたり約5人～10人で、神経内科の病気としては、脳血管障害（人口1万人あたり28人）に次いで多い。

厚生労働省の「特定疾患」指定は、123疾患あり、公費負担になるのは45疾患で、パーキンソン病は45疾患のうちの1つです。

#### (1) 主な症状

##### パーキンソン病の4大症状

##### ①「体がふるえる」・・・振戦

パーキンソン病では動作をしていないときに強くふるえる傾向

##### ②「筋肉がこわばる」・・・筋固縮

腕をひじのところで曲げ伸ばしします。そのときに医師がギコギコとかガクガクとした規則的な抵抗感を感じたら、パーキンソン病を疑う鉛のパイプを曲げているような感じとも言われる

##### ③「動作が緩慢になる」・・・動作緩慢

歩くことをはじめ、すべての動作がノロノロと遅い

歩行する際は歩幅が小さくなりチョコチョコと小刻みな歩き

##### ④「体が傾いたり倒れそうになったときに、バランスがとれない」・・・姿勢反射障害

バランスをうまくとることができなくなり、体が傾くと体勢を立て直すことなくそのまま倒れる

歩き始めると徐々に小走りになって、なにかにつかまらなると止まらない「突進現象」も起こり、日常生活の中で、大きなけがをするリスク

⑤発症後は、ふるえなどのほかに、突然動けなくなる「無動や寡動」、また足の指が跳ね上がったたり、手、足、首などが硬直する「ジストニア」という症状が、痛みを伴い苦痛だと訴える方も多い

⑥若年患者の場合には、比較的、ふるえの症状は少く、無動、寡動、ジストニアなどの症状が多く見られる

⑦自律神経障害

便秘、よだれ、汗をよくかく、手足のチアノーゼ（皮膚が青紫色になる状態）、むくみ、冷感、低血圧。とくに急に立ち上がった時に血圧が下がり、ひどいときは失神

・排尿困難

完全に排尿しきらない（排尿障害）、尿の回数が増える（頻尿）、インポテンス、などの症状

・精神症状

気分が滅入り、なにごととも面倒くさい

依頼心が強くなる場合が多い（パーキンソン病になったことで落ち込む、パーキンソン病自体の症状でもある）

記憶力の低下、不眠の訴えも多い

⑧その他

まばたきが少なく、仮面をかぶったように表情のない顔つき（仮面様顔貌）

小声で単調な抑揚のない話し方（構音障害）

言葉の最後の方が小さく、口の中でもごもごとした話し方

食事を噛んだり、のみ下すことが難しくなる（咀嚼、嚥下障害）

字に力がなく小さく、書くにしたがってますます文字が小さくなる（小字症）などの症状

（2）パーキンソン症候群

パーキンソン病と同じ症状は、ほかの原因でもみられることがあります。これをパーキンソニズムやパーキンソン症候群と呼んでいます。パーキンソニズムを呈する疾患としては、脳血管障害（脳梗塞や脳出血）、脳炎の後遺症、脳腫瘍、脊髄小脳変性症などの脳障害や、薬の副作用、一酸化炭素中毒などがあります。